

I. 論考

「大学生の学び・社会で学ぶこと」2021年度リニューアル報告 －「社会の現場で学ぶためのリテラシー」とは－

RSLセンター 助教・藤井 満里子
ゲストスピーカー・奥野 敦史

RSLセンターの「大学生の学び・社会で学ぶこと」は、2016年より開講しているサービスラーニングの講義系初年次推奨科目である。なるべく多くの学生が履修できるよう、4科目(新座1科目、池袋3科目)を開講している。2017年にセンターに着任した藤井は、このうち新座と池袋の2科目を担当し、その他の2科目は学内外の教員に依頼する形で毎年4科目を展開してきた。内容は前半が自校教育(建学の精神、正課外・正課教育、サービスラーニングについて)、後半が各担当教員の専門性に合わせた内容である。

新型コロナウイルスの影響により、全学的にオンライン授業が始まった2020年5月、科目開講から5年が経過し、次年度末には藤井の任期が終了することも見越して、RSLセンター内では本科目をリニューアルしてはどうかという議論が始まった。

本科目にはいくつかのニーズがあった。まずは講義系の本科目でRSLとしての基礎的な部分を学んだ後、できればRSLローカル、コミュニティ、グローバルなどの現場で学ぶ「実践系科目」へと繋げ、RSL科目全体の履修者を増加させたいというニーズである。この時点で本科履修者が、次学期のRSL講義系、実践系科目を履修する率は低く、全体の約3%にとどまっていた。このため、RSL実践系科目の中からいくつかの団体の協力を得て、具体的な活動内容や社会的な課題、そこで活動する意義などを知らせ、履修学生の興味関心を喚起することが、最初の改訂ポイントとなった。

また、そうした実践系科目の履修に繋げるためには、サービスラーニングのベースとなるリテラシー部分の学修機会が少ないことも課題であった。社会の現場に入り学ぶ際には、コミュニケーション能力や、現場の現状や課題を理解し、考えたことを適切に発信するための表現力が求められる。このため、本科目の中で、そうした社会の現場で人と関わりながら学ぶためのスキルについて学ぶ時間を設けたいというニーズが生じていた。当初は人事課から研修講師を紹介してもらうなどの案もあったが、本科目の2017年度からのゲストスピーカーでもあり、藤井の旧知の元新聞記者の方(元毎日新聞・奥野敦史氏)にそうした相談を投げ掛けたところ、次年度のリニューアルに向けて、具体的なご相談が可能であるとの返答を受け、まずは藤井の2021年度春・秋2科目において、それぞれ2回分を確保し、社会の現場で学ぶためのリテラシー部分の向上を目指すことになった。

この時点で、RSLの入門的科目として、リニューアル全体のゴールを下記のように定めた。

- (1) 大学での学びの構造を理解するとともに、現代社会にある多様な社会課題を認識し、本学の建学の精神を土台としながら、サービスラーニング(シティズンシップ教育)の意義と目的について説明できるようになる。
- (2) 一市民として、自らの身の回りにある「社会課題」について、それがなぜ社会課題なのかを理解し、その課題を解決するために行われている取り組みを説明(表現)できるようになる。
- (3) 社会の現場で学ぶためのリテラシーとして、「聴く」「書く」「伝える」の基本的な技術を理解し、習得することができるようになる。

奥野氏には、とりわけ(3)の部分の強化を目指したい旨を伝え、具体的なご相談を始めたのは2020年

度春学期ゲストスピーカー回を終えた 7 月からであった。その後、何度かのプレストを重ねつつ内容を構築することになった。その詳細を下記にご本人よりご紹介いただくこととしたい。

* * *

ここからは、RSL センター「大学生の学び・社会で学ぶこと」において、奥野が実施した「“創造”のためのリテラシー(全 2 回)」の構成内容と、その狙いを解説したい。その前段階として筆者(奥野)自身のキャリアについて簡単に述べる。

筆者は 1993 年、毎日新聞社に記者職として入社し、以来 2010 年 9 月まで 17 年 6 カ月を新聞(いわゆる「紙の新聞」)の記事を書き、編集するジャーナリストとして勤務した。その間、他の記者が出稿した原稿をチェック、修正する編集者(新聞社では一般に「デスク」と呼ぶ)業務も担当している。入社 2 年目以降、科学分野の取材を専門的に行い、特に医学、生命科学領域を長く担当した。2010 年 10 月にはデジタルメディア局に異動、それまでの取材・執筆・編集業務に加えて、デジタル領域の新規事業開発を担当することになった。その流れで、2014 年春から同社初の医療情報サイト「毎日新聞 医療プレミア」(<https://mainichi.jp/premier/health/>)の立ち上げを担当し、2015 年 6 月の創刊と同時に初代編集長に就任して、約 2 年間サイト運営の責任者を務めた。2017 年 9 月に同社を退職、株式会社マイナビに転職し、2022 年 2 月まで主に医師・医学生向けサービスの企画、運営を担当した。

肩書きや担当媒体の変遷はあったが、筆者の業務は一貫してメディア、ジャーナリズムと医療・医学の交差領域で展開してきた。そのような背景もあり、2017 年、最初に参加させていただいた「大学生の学び・社会で学ぶこと」の講義では、①「メディア」の機能と責任、②「メディア」に接する際のスタンスと心構え、③伝達、拡散される情報に振り回されないための判断軸の持ち方——などを中心に解説した。これはいわば、情報の「受け手」としてメディアをうまく使う、逆の視点で言うと、無意識のうちにメディアに従属的に利用されないためのリテラシーを伝えるためのものであった。折しも、米国でのトランプ政権誕生をトリガーとして、SNS を中心に陰謀論的情報、フェイクニュースが世界を席卷する事態が起きていた。以後 2020 年度までの講義は、そのような時勢の中で創り出した「メディア(を活用する)リテラシー」の基礎を伝えるものであったと言える。

一方、2020 年 7 月に藤井助教から新たに提示された課題は、端的に言えば「情報を発信する側のリテラシー」をコンパクトに伝えられないか、ということであった。立教大学を卒業する学生は、アカデミア、ビジネス、アート、スポーツなど、さまざまな領域で国内外の社会に対して情報発信を担う役目に就くことが多いと考えられる。RSL センターのミッションステートメントには「社会の中で状況や立場に応じて多様な役割を果たすという意識と態度を形成」という記述があるが、まさに社会における多様な役割に応じて、取り組みの現状、達成率、新たに生まれた課題などの情報を、常に収集、整理、発信していくことは、卒業生に期待される基本的な機能だと言えるだろう。

第二次世界大戦後、高度成長期に起きたメディアの爆発的大衆化の時代には「時代に遅れない」情報感度の高さが市民層の重要なリテラシーであった。それが 2010 年頃から後に言うフェイクニュースの台頭、蔓延が始まり、同時に個人情報漏洩、悪用が問題となった。この時代から現在に至るまでは、「だまされない」という情報の選別力の重要性が高まり続けている。そして 2020 年代以降、各種 SNS プラットホームの普及、拡張によって、すべての人が極めて低コストで発信者となることが常態化し、市民自身が「発信者としての質を高める」ことが求められつつある。藤井助教の示された新たな課題は、そんな「情報にまつわるリテラシーの大局的变化」を教育現場の最前線で敏感にキャッチしての提言だと筆者は理解した。

プレストは「RSL で提供できる・提供すべきリテラシーとはなにか?」というテーマからスタートした。筆者

が最初に示した案は「インプットとアウトプットのスキル」であった。一般的にスキルというと、レポートの書き方や就職面接対策のノウハウのような定型化、マニュアル化されたノウハウをイメージされるかもしれないが、ここではより中長期的な視点で、学生の将来の仕事、いずれ担うであろう社会的責任を果たすために必要な教養、とでも言うべきものを想定している。

この見解には、ジャーナリストという職業の特殊性の影響が少なからずある。職業ジャーナリストは古今東西、人から話を聞き、それを文章や口頭での発言に転換して発表している。その際、つきまとうのは発表される素材となった取材対象者の人権の問題である。実際の講義でもこの点を指摘したが、ジャーナリズムにおけるすべての取材は対象者の人権を侵害するリスクをはらむ。それは何かを「暴露」する記事・取材だけに限らない。個人を特定できる状態で(たとえば個人名を記載し)何らかの記述を行い、不特定多数に発表することは、取材される当事者自身も認識していないリスクを潜在的に抱えているという意味だ。

それ故「人を取材する」行為は、リスクを背負ってなお伝えるべきである、という価値と目的が明確に存在して初めて行える。隠蔽された不正を告発する取材などで、取材を拒む対象者から話を聞き出す場合はもちろん、対象者の協力を得て行う一般的なインタビュー取材の場合でもその前提は変わらない。そして、対象者に納得してパーソナルなエピソードを提供してもらうには、相手の信頼を得る関係構築を行い、それを維持するプロセスが必要になる。プロセスは取材を申し込むファーストコンタクトの時から始まり、取材時の会話、事後の事実確認や原稿チェック等のやりとりへと続いていく。当然、会話にしてもメールにしても、踏まなければならない手順、踏んではならない禁忌は多数存在し、プライベートな会話などと比べると格段に複雑になる。

これらのプロセスは、現場では「取材のイロハ」などと称され、記者がキャリアの中で身につけてきた経験則に基づくものが多い。上司、先輩からたたき込まれ、取材者という関係が作れる＝いい取材成果が得られた体験と、決裂し果実が得られない体験を繰り返し、得てきた暗黙知とも言うべきものだ。近年は筆者自身も後進を指導する中で、このような経験則、暗黙知を教授することが増えていたが、その内容が十分体系化されているとは言えなかった。藤井助教の提案は、筆者が蓄えてきた取材＝インプットとアウトプットの手法を「コンテンツ」としてまとめる機会を提供してくれた、とも言える。

「インプットとアウトプットの技術」を考えると、具体的に「読む」「書く」「伝える」というキーワードが浮かび上がった。後々「伝える」は「書く」に包括されるものとみなし、筆者において「よむ・きく・かく」の3つのキーワードに集約させた。ひらがな表記にしているのは、「きく」には「聞く・聴く・訊く」の3種の漢字が当てられ、その違いに意味があると考えたためである。「よむ・かく」はそれに表記を合わせたのみで他意はない。

前述の通り、本講義は筆者自身の経験を整理し、言語化、コンテンツ化したものである。ジャーナリストの先人より伝えられた数々の知見がその中に含まれるが、体系化された学問のように、再現可能な手法で実験を繰り返し、蓄積されたデータに基づくものではない。一方で、文章の書き方については、谷崎潤一郎、三島由紀夫、川端康成などの文豪が「文章読本」としてさまざまなノウハウを残しているし、話し方に至っては古代ギリシャ以来の修辞学の歴史がある。身近なところに目を移しても、途切れない雑談の仕方、インタビューの手法、聴かせるスピーチや読ませる文章のテクニックなどをまとめた本は枚挙にいとまがない。筆者と同業の元、または現役の記者の手になるものも多い。

それらの幅も奥行きも巨大な先行例に対して、どのような差別化をするべきか。出した結論は、端的に「実践的であること」だった。言い換えれば、当日、翌日の授業やサークル活動、アルバイトの現場で使い始められるノウハウを盛り込むことだ。対象は1年生、大学での学び方が高校までと異なることに気付いてはいるが、具体的な方法論を確立できていない学生とした。藤井助教からは「最初に聞いた時は少し難しそうと感じるが、慣れれば自分でも使いこなせそう、使えるようになりたい、と思えるレベルを狙ってほしい」との

指摘があった。

講義のタイトルは「“創造”のためのリテラシー」とした。その意味は、①新しいものを、②自力で作り出すための、③基礎的能力を養う講座と定義している。全 2 回構成とし、1 回目で「インプット＝よむ・きく」について、2 回目で「アウトプット＝かく」について解説することにした。

ここでは 1 回目の講義の内容を簡単にたどりながら、本講義の意図と狙いを説明したい。まず人が他者に何かをなす行為はほぼすべてインプットとアウトプットの組み合わせでできていることを解説した。「あなたが友人の誕生日プレゼントを選ぶプロセス」にも、「アインシュタインが相対性理論を生み出したプロセス」にも、必要不可欠なインプットと、成果物としてのアウトプットがある。スティーブ・ジョブズが iPhone を作り出した背景には、日本産を含む多数の先行発明が存在し、ジョブズがそれを取り入れ、理解し、自己の知見として消化していた事実がある。逆に「迷い抜いて選んだ友人へのプレゼントがまったく響いていない」という学生にとって身近で恐ろしい事態は、友人の好みや現在の所持品に関する調査＝インプットが不足していることを意味すると説明した。ちなみに授業において示す事例は、1 年生でもイメージしやすい日常的な題材を最初に出し(プレゼントの例のほか、大学入試やサークルの幹事連絡の方法など)、次に数年後の彼らが直面する初歩的なビジネススキルでのつまずきの例を用いた(業務報告がまずいと叱られる、アイデア出し会議が苦手など)。学生たちが社会の現場に出て、人と関わりながら経験を積み、やがて働くようになった自分の姿をイメージしながら学ぶことも、RSL センターの役割、特性の一つと考えた故の小さな工夫である。

続いてインプットの技術である「よむ力」を説明した。大学に限らず企業でも「国語力がない」「日本語能力が低い」という嘆きは頻繁に聞こえてくる。多くの「いい文章が書けない」事態の原因は、書き手自身の「読み込み不足」にある。つまり「自分の文章に粗がなくなるまで、徹底的に読み込んでいない」ということだ。読み続ける持続力の不足が、文章の質の低下を引き起こしている。筆者はこれまで推定 3 万本超の原稿を編集してきたが、低品質の原稿ばかり出してくる書き手は、「書き終わった」と思った時点で筆を置き、その後の推敲はおざなりという人がほとんどであった。文章というアウトプットの質を高めたいならば、最初は暗唱できるほどまで自分の文章を真剣に反復して読むことが必須だ、と伝えた。

「よむ力」については、書籍やウェブサイトなどのテキスト情報を読むことに加えて、世の森羅万象を常に「よむ」習慣づけの重要性を指摘した。具体的にはメディアで得た情報、街中で見聞きした事象などをきっかけに、①それに関連する情報、知識を芋づる式に探るメソッド、②その背景にある制作者の意図を探るメソッドを紹介した。筆者はそれぞれ「連想 A」「連想 B」と名付けている。筆者の経験では職種を問わず、優れた実績を残している人は日常的にこの 2 つの連想を行い、知識や情報のアップデートと、世の中の多様な成果物(アウトプット)が生まれるプロセスの考察を続けている。

講義中で紹介した例を挙げる。連想 A として、とある映画に出てきた「ヒドラ」という言葉から、腔腸動物の 1 種、アニメやゲームのキャラクター、いくつかの神話に登場する怪物などの情報を経て、日本の八岐大蛇など世界中に存在する多頭の怪物の伝承の謎に視点を飛ばす例を紹介した。作業としてはネットの情報を渉猟することに近いが、日常の隙間時間に生じた関心、疑問から常に知識の幅を広げていくことができる。これはスマートフォンの普及で格段に取り組みやすくなった。

連想 B は一種の思考のトレース実験である。講義ではこちらも映画を題材に、ある洋画の本国(アメリカ)版と日本版のポスターデザインの極端な違いを示して、学生にその際が生じた理由を推測してもらった。この事例については、日本の配給会社の取材記事が実際に公開されており、「答え合わせ」することができたため、より学生の関心を惹くことができた。もう一つ、著名な俳優を 5 人使い分けているビールのテレビ

CM を例に挙げ、どの俳優に何の役割を期待しているのか？を考えさせた。いずれもマーケティングとクリエイティブの多くのプロフェッショナルが参加して創られているものであり、空想であってもそのプロセスの追体験を試みることは、インプットの重要な柱である発想力、想像力を生む訓練になる。

続いて「きく」インプットの手法を紹介した。まず「相手」の存在が前提となるこの手法では、相手への敬意と感謝が必須となる。そのうえで対象者自身の想定を超える話を引き出すには「共感・リズム・レスポンス」の 3 点が鍵だと紹介した。共感とは対象者に「この人はきちんと話を聞いてくれる」と感じてもらうことから始まる。そのためには取材者が「聞きたいことがたくさんある」状態にならねばならない。また自分の心のうちを含む極めてパーソナルな話を聞き出すには、取材者の素性と取材の意図を丁寧に説明せねばならない。プロのジャーナリストでも、聞くことに注力しすぎてなおざりにしがちな「私は何者か、何を書きたいのか」を話す時間の重要性を指摘した。この点は、巷間の取材ノウハウ本でもあまり指摘されていないポイントである。

次に取材において用意する質問は 3 つまで、というルールを紹介した。事前準備を徹底し、多く質問を考えても、手元に用意する質問は 3 つに絞る。それは対象者から出てきた答えに応じて、次の質問を臨機応変に変えていくためである。大量に用意した質問を順に繰り出していくだけでは、アンケートと違いがなく、予想外の会話の進展の芽を自ら摘んでしまうことになる。1 回目講義では、①トランプ前大統領、②自分の好きなアーティスト(個人に限る)、③講師(奥野)のいずれかに、三つの質問を用意する、という宿題を課して終了している。

リアクションペーパーを見ると、学生たちは自身の学業やその他の生活に引き寄せて、筆者が紹介した手法を活用したい、という意気込みを見せてくれた。2 回の講義を終えた後は「授業のグループワークで 3 つの質問の方法を使ってみた」「部活のブログを書く時に活用してみた」など、具体的な実践の報告が多数寄せられたのは、筆者にとっても大きな収穫であった。

本講義は新座で 7 月、池袋で 12 月～1 月に実施したが、新座での学生の反応を踏まえて池袋の講義内容のアップデートも行った。この中で小さな変化にもかかわらず効果が高かったのは、学生に刺さるキャッチフレーズの工夫だ。

例えば前述の連想 B のプロセスは、池袋講義では「企画のリバースエンジニアリング」という表現で紹介している。リバースエンジニアリングとは「既存の完成品からそれがつくられたプロセスを再現する」ことで、完成したソフトウェアから、そのプログラムのロジックやコードの復元を試みることなどを指す。「企画のリバースエンジニアリング」はさまざまな完成したプロダクト、たとえばテレビ CM を見て、その最上流の企画意図から音楽やビジュアルに込められたデザイナーの狙いなどをさかのぼって考えていくこと、と説明した。結果、複数の学生が授業で印象に残ったキーワードとして、この言葉を挙げた。このようなキャッチフレーズの作成も、目を引く記事のタイトルを作る編集者の能力の応用である。

前述の通り、本講義は言語化もされていない経験則、暗黙知のコンテンツ化、教材化の取り組みであった。困難な点、まだ練度の低い点は残っているが、学生の能力の高さの助けもあり、「実践的」という目的に沿った結果が概ね出せたと考えている。素晴らしい機会をいただいた藤井助教に心から感謝申し上げたい。

* * *

奥野氏のご講義のポイントは、記述にもある通り、人が他者に何かをなす行為はほぼインプットとアウトプットの組み合わせでできており、すべてがそこから始まるというものである。それらを構成する要点の解説が非常に具体的で、とくに大学 1 年生の学生が興味を持っていそうな話題、理解しやすい事例を取り上げて紹介されたことも、この 2 回が学生たちの脳裏に印象深く刻まれる結果となった。

学生の声としては「自分に身近に感じられることや社会課題、さらに自分がすぐにでも吸収できる要素、例えば話の聴き方や質問に関する話など、たくさんの収穫があった」「この講義から、大きな目標を達成するにしても、まず、物事の基本を押さえることが一番の近道だと考えることができた」などが聞かれた。また、春学期に受講した学生の中には極めて積極的な意見として次のようなものもあった。「この授業は大学生という立場がいかなるものなのかを認識できる講義だったが、一つ不満がある。それはゲストスピーカーの順番である。リテラシーの 2 回の講義は非常にためになるものであった。その中で出てきた聴く力というのは、この講義にとっても生かせる能力なのではないだろうか。実際私はこの話を聴いてから、いろんな方の話に注意して聴いているが、今までより聴く力が格段に上がったと理解できる点が多々ある。この授業が初めにあれば、ほかの方の貴重な話もより深く聴けたのではと思っている」

この学生の指摘にあるように、早めの回でこのリテラシー部分を配置するという案も、確かに的を射たりクエストであると感じるが、そうした要望が出るほど、履修生にとってこの講義のインパクトは強く、実践度合いは高かったようである。依頼者である藤井からすると、これらの声は、事前の相談時に伝えていた「最初に聴いた時は少し難しそうと感じるが、慣れれば自分でも使いこなせそう、使えるようになりたい、と思えるレベル」の、ちょうど真ん中を射貫かれたような爽快感を感じる部分である。

「人を取材する」行為にまつわる、いわゆる違法性阻却の話も、サービスラーニングを進めるうえでは極めて重要であった。学生たちが社会的に課題を抱える学外の現場に出て、様々な立場の人の話を聴き、課題解決へと繋げるために某かの行動を起こしていく際には、その学生自身が現場でどんな話を聴き、現状をどう理解し、何を課題として受け取るのか、また現場の声を第三者に伝えていくことも踏まえれば、そこに違法性阻却という考え方が存在することは、認識しておくべき大切なリテラシーである。

実際に、活動中に知り得た情報の取り扱い等については、これまでは学外に出る前の手続きのひとつである「誓約書」などを盾として、情報の嚴重な取扱いや情報漏洩などについての注意喚起を行ってきた。しかし本来的に考えるならば、奥野氏の述べる通り、「人を取材する」行為は、リスクを背負ってなお伝えるべきである、という価値と目的が、明確に存在して初めて行える」ものであり、「対象者に納得してパーソナルなエピソードを提供してもらうには、相手の信頼を得る関係構築を行い、それを維持するプロセスが必要になる」というのは当然のことである。この点については、我々のようなサービスラーニングの関係者が学生を現場に送り出す際には認識しておくべき必須のリテラシーであることに、改めて気付く貴重な機会となった。

さらに、奥野氏の講義は全体を通して、大学で学ぶことの根本に迫る非常に重要なポイントがちりばめられている。例えば報告でも述べられているように、「背景にある制作者の意図を探るメソッド」の「連想 B」として伝えている部分である。それは「企画のリバースエンジニアリング」を日々考えることであり、出来上がったものを分解して、どんな部品でできているのかを考える日常の訓練であるということだが、授業では、なぜそのような訓練が必要なのかについても言及されている。それは、こうした思考の訓練の先にあるのが、「人生で経験することのすべてに「自分への問いかけ」があり、新たな価値に気づくプロセスであるから」と奥野氏は説明している。

そのほかにも学生たちに「インプットとアウトプットの間にあるあなたの役割は何か」と問い掛け、その介入価値について考えさせたり、「アウトプットの結果責任は自分に返ってくる」など、社会の現場に出て学ぶうえでの根本的な問いや責任について、具体的な事例を伴いながら解説された。

これらに対して履修学生からは、「将来、いかにして大学で学んだことを活かすかを考えていた中で、「介在価値」の話聴き、社会を意識しながら学べば、自分が伝えたい、社会の変えたい部分や人々に知ってほしい事柄を多くの人に届けることができるかもしれないというアイデアを得られた」という声や、「社会」を意識しながら学ぶということは、自分を「社会の一員」として認識することだと思う。ただ自分の興味のあることを学ぶのではなく、その過程で周りの人々、つまり社会を巻き込んでいくことが大切だ。そうしていくことで自分のいる「社会」が広がっていく。とくに「連想」の話は、社会に散らばっている様々なことを結び付けて考えることであり、その「連想」をすることで、より「社会」の中にいる自分を捉えることができるのだと思った。そういった広い視野を持ちながら日々学んでいくことが、「社会」を意識しながら学ぶことにつながるだろう」という、まさに本質をつく感想も見られた。

この講義自体は、冒頭で述べた通り、「社会の現場で学ぶためのリテラシー部分の向上を目指す」ためではあったが、RSL センターの根幹を形成する講義系科目という位置付けを考えるならば、社会の中で自分がどのように生きていくかを学生自身が自らに問いかけ、そうした視点や姿勢を自覚的に養うことが重要である。そのような基礎力に裏打ちされてはじめて、身近な組織、地域やコミュニティ等に向かって働きかけ、行動する実践力が構築されていく。奥野氏は授業でそのリテラシーを「知的活動の基本、基礎体力となるもの」と述べたが、本講義は、「社会の現場で学ぶ」サービスラーニングのまさに一丁目一番地を照らし出すような講義であったように思う。これは、奥野氏が、本科目が抱えていたニーズを汲み取り、目先のスキルにとどまらず、より中長期的な視点で、学生の将来の仕事、いずれ担うであろう社会的責任を果たすために必要な教養を想定して、まさに創造性の高い講義を届けてくださったからに他ならない。

藤井は任期終了に伴い、2022年3月でRSLセンターを離れるが、この1年半をかけて試行錯誤した軌跡が、何らかの形で次へと繋がることを願いながら、本稿を終えたい。

これまでの経験を惜しみなく学生たちに与え、大学時代の学びを豊かに前進させる機会を与えてくださった奥野氏に、心からの感謝を申し述べたい。

《執筆者紹介》

藤井 満里子

RSLセンター助教

キャリア教育の視点からサービスラーニング科目に従事

奥野 敦史

「大学生の学び・社会で学ぶこと」ゲストスピーカー

ジャーナリスト((株)メディプロデュース 新規事業開発担当)／日本医学ジャーナリスト協会正会員